

古墳上の継承儀礼説について

祭祀研究の立場から

Rituals of Royal Succession on the Surface of Tumuli during
the Kofun Period

岡田精司

はじめに

①研究史の検討

②記紀に見える葬儀と墳墓

③葬送と大王継承儀礼

④古代天皇の継承儀礼

⑤大嘗祭王位継承儀礼論の系譜

⑥地方首長の継承儀礼

⑦古墳祭祀の基本的条件

まとめ

【論文要旨】

古墳の墳丘上において、大王もしくは首長の継承儀礼が挙行されていたという説が、定説化した観がある。しかもそれは律令制下の大嘗祭と同じものであったとされる。この説は歴史学や祭祀研究から見て、科学的な根拠のあるものとは思われず、大きな誤解と矛盾の上に成り立っている。

第一に、記紀・風土記をはじめとする古代文献には、墳墓で継承儀礼を行ったような史料は皆無である。葬礼や墓前祭祀と王者就任の儀式は、全く別の次元の儀礼である。

第二に大嘗祭については、次のような問題があり、大嘗祭自体が古墳時代の大王もしくは首長の就任の儀礼であったと見ることはできない。

- (1) 大嘗祭は天皇になる儀礼ではない。古代においては、即位儀こそが天皇就任の儀礼であった。大嘗祭は、即位の一定期間後に挙行される最初の新嘗祭であり、即位儀の付属行事である。
- (2) しかも大嘗祭は691年に持統天皇が初めて行った律令的儀礼であり、それ以前に大嘗祭が挙行されていたという証拠は全くない（従って古墳時代に行われるはずがない）。

第三に、大嘗祭を“天皇霊”の継承の場とし、“天皇になる儀式”と説くのは、昭和十一年(1928年)における折口信夫の論文が最初であり、実証的な考証ではなかった。古墳上の継承儀礼説はこのような性格の折口説を、戦後になって古墳葬制に結合したものである。

装飾古墳も継承儀礼説では説明できない。また地方豪族の就任儀礼についても、それが墓前において挙行された痕跡は全く認められなかった。古墳の祭儀は、葬送儀礼や来世観(死後の世界)から考察すべき性格のものであろう。